

Title	故山岸昭雄先生をしのんで
Author(s)	竹内, 徹也
Citation	大阪大学低温センターだより. 1993, 84, p. 22-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10627
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

故山岸昭雄先生をしのんで

それは余りに突然の出来事でした。8月9日午前11時、中央アルプス空木岳の登頂を終え下山途中、先生は深い谷に滑落し帰らぬ人となってしまいました。超人的な体力を持っている先生だから「いやーおっちゃったよ」と笑いながら帰ってくると信じていた私は、暫く何も手につかず悲しみにくれています。

山岸先生と私の出逢いは6年半前、私が4年生で理学部の伊達宗行先生の研究室に配属になり、山岸先生に就いて研究をはじめたのが最初です。以来公私ともにたいへんお世話になり、学問的にも、また人間的にも非常に尊敬していた先生でした。4年生の私は、まず先生の口癖から工作技術まで、全てを真似することからはじめました。先生が私たちに何かを頼まれるときによく使われる「あのさー……してくんねーかなー」というフレーズを、伊達研のコンパの時に私が真似した時の恥ずかしそうな笑顔を懐かしく思い出します。先生の技術を真似して私なりに考え実験装置を作っても、必ず先生は「ここはこうしたほうがいいんじゃないの」とおっしゃり、一度で採用になった記憶はほとんどありません。

1987年に極限物質研究センターが設立され、装置もまばらな部屋でよく先生と共に測定用のケーブルを張り巡らせたり、装置を立ち上げたりしたのを思い出します。当時は、センターまでの距離が理学部から少し遠いため他の学生はほとんどセンターに寄りつかず、いつも先生と二人で作業していた様に思います。山岸先生は一人きりで広い部屋で仕事をされていると、よく歌を口ずさみながら手を動かしていました。ロシア民謡の“トロイカ”から石原裕次郎さんまでそのレパートリーは広いものでした。中でも思案にくれるときの決定版が青江三奈さんの“長崎ブルース”の一節「ど～すりゃいいの～さ思案橋」でした。きっと先生は一人きりだと思って声高らかに歌っておられたんでしょう。それをとなりの部屋で聞きながら、笑い声を押さえていたものでした。

極限物質研究センター超強磁場部門も軌道にのり、強磁場マグネット開発から生体磁場効果まで、御自身の研究もこれからというときに逝かれた先生の心中を察すると、なんともやりきれなく、一方で我々が頑張らねばという思いで一杯になります。また御家族の胸の痛みは計り知れない程だと推察いたします。

山を自然を愛し、浪漫にあふれたお人柄である反面、学問的な議論では厳しく指導して頂きました。最後に先生への感謝と哀悼の意を表して筆を置きたいと思います。ありがとうございました。そして安らかにお眠り下さい。

大阪大学低温センター

竹内 徹也